

《特別寄稿》

ICD創設者奥村鶴吉先生に関する再々調査の報告 —ICD創設100周年記念を迎えて—



ICD日本部会 広報・編集担当常任理事

今 村 嘉 宣

●抄 録●

一昨年、国際歯科学士会は創立100周年を迎えた。これを機会に奥村先生とOttofy先生とのICD創設時の関わりについて再々調査し、第50回冬期学会で報告する予定であったが、残念ながらコロナ感染症蔓延により冬期学会は中止となり発表する機会を失い今日に至った。

ICD創設者奥村鶴吉先生については、過去に森山徳長先生がICDの雑誌にも幾度も投稿し、ICDのHPの「ICD日本部会の沿革」について述べている。また2015年には国際理事の橋本光二先生が、ICD雑誌第46巻1号に「ICD創設者奥村鶴吉先生に関する再調査の報告」として纏めている。更にその後、鈴木設矢元副会長らによる奥村先生の動画も発見され編集されている。このような中、宮崎 隆元会長よりICD創設当時の史料の再発掘調査の依頼を受け、母校東京歯科大学井出吉信理事長・学長の許しを得て千葉キャンパス図書館大学史料室倉庫を調査した。

その結果、資料中から奥村先生の数千の保管書類からICD設立当時の奥村先生とOttofy先生との書簡数通、奥村先生のICDの認証書（原本）、奥村先生がシカゴであつらえたICDのガウンとアカデミックキャップなど数々の貴重な史料を発見した。さらに東京歯科大学学会雑誌「歯科学報」の前身である「歯科醫學叢談」にOttofy先生が来日した折の報告紹介文や、「DENTAL BRIEF」にOttofy先生が投稿した当時の日本の歯科医療状況の二度にわたる報告論文も検索できた。またOttofy先生より寄贈された「STANDARD DENTAL DICTIONARY」も貴重本書庫より見つかった。

キーワード：奥村鶴吉、Louis Ottofy 国際歯科学士会、東京歯科大学史料、奥村-Ottofy書簡、ICD創設時定款・会則、ICD創設時役員、奥村鶴吉ICD認証書、奥村先生アカデミックガウン・キャップ

I. はじめに

一昨年、国際歯科学士会は創立100周年を迎えた。これを機会に奥村先生とOttofy先生との創設時の関わりについて再々調査したものをICD日本部会の第50回冬期学会で報告する予定であったが、残念ながらコロナ感染症蔓延により冬期学会は中止となり、その後、日本での100周年記念会も中止となり、発表する機会

を失い、今日に至った。

ICD創設者奥村鶴吉先生については、過去に森山徳長先生がICDや日本歯科医史学会雑誌に何回も投稿され、それらをまとめてICDのHPでも掲載のとおり「ICD日本部会の沿革」として述べられている¹⁻¹²⁾。また2015年に元国際理事であった橋本光二先生が、ICDの雑誌（第46巻1号）に「ICD創設者奥村鶴吉先生に関する再調査の報告」として纏めている¹³⁾。

更にその後、鈴木設矢元副会長らによる奥村先生の動画も編集されている (<http://www.youtube.com/watch?v=XPjDJMK8yaY>) (ICD日本部会HPより)。

なお、本文中には本年ICD本部より発行された、オリエンテーション・リーダーシップマニュアルに掲載された内容と重複する個所があるが、当初の発表予定当時は無かったので、ご容赦いただきたい。

Ⅱ. 東京歯科大学史料室倉庫について

一昨年、当時の宮崎 隆会長より広報・編集担当常任理事である私に奥村先生の創設当時の史料の再発掘調査の依頼があった。

そこで私の母校である東京歯科大学井出吉信理事長・学長のお許しを得て、母校千葉校舎図書館の史料室の東京歯科大学歴代学長の大学史料室倉庫を調査させて頂いた。この史料室は我が母校創設者の高山紀斎先生に始まり血脇守之助先生など歴代学長の関連資料の系譜を展示しているが、その史料室の奥一角に開かずの間である大学史料室倉庫があり、ここに歴代学長の貴重な遺品や史料が保管されている (図1～2)。

この部屋は当然、通常は一般公開されていない。実は私がこの部屋の存在を知ったのは遥か40数年前、千葉の稲毛に大学が移転した頃、図書館で文献検索をした折に、大学名誉教授でもありICDのフェローでもあった長谷川正康先生に声をかけられ、「今村君、君もお爺さんの代から大学の同窓だから知っておいてもらいたい史料がある。」と言われ、この開かずの間の史料室倉庫に案内された。その後、我が母校出身で愛知学院大学名誉教授でもある、父の恩師榊原悠紀田郎先生にもこの部屋や温度・湿度管理された貴重な古書の保管庫に案内された。過去にこのような機会があったればこそ、今回の調査の結果に辿りついたものと、先人に感謝するものである。

Ⅲ. 奥村鶴吉先生の来歴

さて、奥村鶴吉先生の来歴については前述の橋本光二先生のICDの再調査の論文でも詳しく紹介されているので割愛するが、一応簡潔に纏めたものを示す (表1)。

榊原悠紀田郎先生はその著書「歯記列伝」のなか

で、奥村鶴吉先生を『血脇守之助の帷幄^{いあく}の人・30年間ナンバー2』と評している (図3)¹⁷⁾。

実に的を得た評価であり、出過ぎず目立たず唯ひたすら血脇守之助先生に仕えたご仁としている。



図1 東京歯科大学千葉校舎図書館史料室

Fig. 1 Tokyo Dental College Historical Museum at Chiba library



図2 東京歯科大学千葉校舎図書館史料室倉庫内部
奥村鶴吉関係書架

Fig. 2 Tokyo Dental College historical source keeping room Dr.T.Okumura rack

表1 奥村鶴吉先生略歴

Table 1 Dr.T.Okumura personal history

1881年12月10日	神奈川県秦野町生
1898年6月25日	高山歯科医学院（東京歯科大学の前身）を入学卒業
1899年	歯科医院を開くための開業試験に合格（第595号
1904～1906年	ペンシルバニア大学歯学部を入学卒業（歯学士：D.D.S.）
1906年8月～	東京歯科医学院（東京歯科大学の前身）の講師
1907年	東京歯科医学専門学校（東京歯科大学の前身）の教授
1909年1月28日	澤田エイと結婚
1920年11月	ICDのアイデアが東京でLouis Ottofy博士と奥村鶴吉博士によって構想される
1924年	医学博士を取得 東京慈恵医科大学、東京
1927年12月31日	ICD（国際歯科学士会）が公式に発足
1946年	東京歯科大学学長
1959年2月4日	逝去



図3 在りし日の奥村鶴吉先生

Fig. 3 Dr.T.Okumura photo as his aging

※因みに「帷幄」とは：幕を張り廻らした陣営で作戦計画を立てることで、主君の傍にいて補佐する臣、参謀のこと

IV. 奥村鶴吉先生の著作物

東京歯科大学千葉校舎図書館には歴史的な貴重な本を保管している特別倉庫があるが、その中の奥村鶴吉先生の著作は、森山徳長先生の調査ではその内容は以下に示す内容である。歯科医学基礎から臨床まで多岐にわたっている（図4）⁹⁾。その内訳を示す。



図4 図書館貴重本書庫に保管されている奥村鶴吉先生の著作物

Fig. 4 The valuable books written by Dr.T.Okumura in TDC library.

1) 論文

●基礎

解剖学9編、組織学2編、病理学2編、細菌学8編、理工学8編、衛生学8編

●臨床

保存学8編、口腔外科学9編、歯科補綴学5編、その他6編

2) 講義のための著書

●歯科学講義（全23冊）：血脇守之助先生と共著、大正元年

歯科解剖学、歯科充填学、歯科医史学、口腔衛生学、歯科手術学、歯科技工学、歯冠継続及び架工学、歯科法医学

●辞典

『英和歯科学辞彙』奥村鶴吉編、大正2年、歯科学報社

●単行書

「野口英世」傳、奥村鶴吉、昭和8年、岩波書店

因みに、奥村鶴吉先生の学位論文は、「齲蝕の起因たる醸酸作用に関する研究」で東京慈恵会医科大学より大正13年に「医学博士」号を受領している。

V. 奥村鶴吉先生が日本の歯科医学に遺した業績

奥村先生は、明治39（1906）年、ペンシルバニア大学留学から帰国後、直ちに東京歯科医学院の講師になり、その翌年、血脇守之助先生のもと東京歯科医学専門学校設立に尽力し、その後、着々と業績を挙げられている。それらは以下のようなものである¹⁶⁾。

●新設された東京歯科医学専門学校での教育

プラグマティズムに基づく歯科医師の育成

※19～20世紀にかけて米国のPeirce, Charles Sandersにより提唱された哲学思想で、知識や価値の問題を行動の場面にひきこみ、有用性または有効性ということを基準として考えてゆく思想。

●口腔衛生の普及と学校歯科保健衛生

●医科・歯科の二元論の確立

●戦後日本の歯科医学教育を進化させた

GHQと交渉しながら専門学校から大学へのいち早い格上げに尽力する

現在での6年制の教育課程を確立し、最初の2年はプレデンタル教育とした

●「野口英世」傳を著作

当時の東京歯科の学生に必携本とさせ、勉学や研究への向学の精神を植え付ける。

渡る。5国語に通じる。

●1877年（明治10）Western College of Dental Surgeonsを卒業。D.D.S.歯科医となりノースダコタで郵便局長をしながら開業する。兵役も1882年少尉で除隊。

●1878年（明治11）にはシカゴに出て開業した。学問熱心でB.J.シグラントの知遇を得てChicago College of Dental Surgeryの教授を務める。

●1883年（明治16）American College of Dental Surgeryの学長を4年間つとめ、その後シカゴ歯科医師会長就任。

●1893年（明治16）シカゴ万博と万国歯科医学会で高山紀斎と出逢い、高山の講演を聞き、Ottofyの東洋熱に油が注ぎこまれる。

●1898年（明治21）『旭日の帝国』日本に渡航することを決心。

2) Dr. Ottofyと日本との関わり

Dr. Ottofyが1898年来日折の報告が東京歯科大学の雑誌「歯科学報」の前身である歯科医学叢談に掲載されている（図5）^{7～9)}。

●1898年（明治31）日本に来訪。

7月 小幡英之助の温交会で「無髄歯の治療法、ブリッジワーク製作法」講演。高山歯科医学院教授就任を希望したが叶わず、2年間横浜で開業（山下町87番地）。日米歯科協会（American Dental Society of Japan）設立。

1899年（明治32）日本の歯科事情を報告。

「Dentistry in Japan」The Dental Brief, 13, 714-718, 1899.

●1900年（明治33）フィリピンマニラにて。

同地で歯科医学教育に従事。マニラ大学に歯学部を設立。

●1920年（大正9）マニラでの20年の指導の後、米国への帰路来日数か月滞在。歓送会を奥村鶴吉主催で受け、ICDの構想練る。

●1921年（大正10）米国カリフォルニア オークランドにて開業。

VI. Dr. Louis Ottofyと奥村鶴吉先生の関わりの始まり

1) Dr. Louis Ottofyの略歴

●Dr. Louis Ottofy（1860～1939）ハンガリーのブダペスト生れ、医師の子

●1874年（明治7）欧州移民として一家で米国に

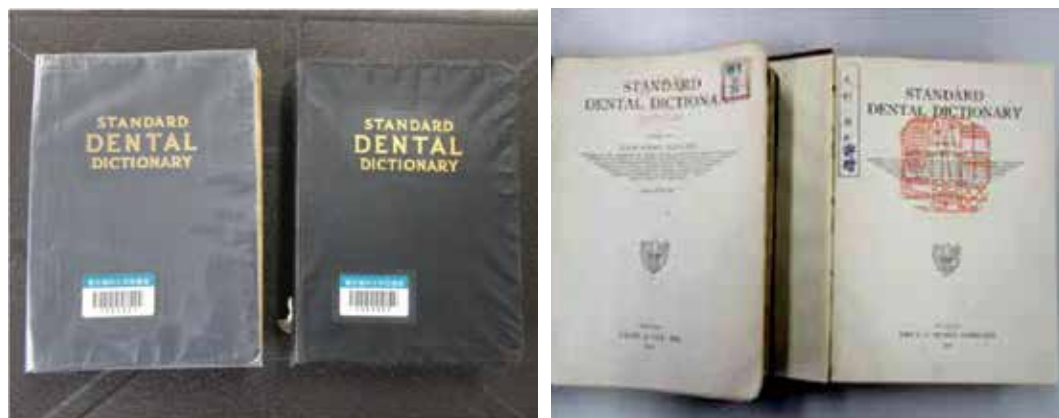


図6 Dr.Ottofy編纂 歯科用語辞典

Fig. 6 Dr. Ottofy wrote 「STANDARD DENTAL DICTIONARY」

り、人体解剖学実習が取り入れられている

3. 歯科医学校では、優れた歯科病理組織学者が業績をあげている
4. 16校もの歯科専門学校や歯科医学校がある
5. 歯科医師国家試験制度が確立され、日本聯合歯科医師会も設立
6. 免許歯科医5000～6000人にのぼっている
7. 口腔衛生運動の関心が高まり、歯科衛生日が決まる
8. 歯磨会社が大衆啓蒙に力を入れている
9. 歯科材料の国産品は輸入品に比べ、劣ると日本人歯科医は言うが、これは製造能力でなく経済的問題であり、量産による品質向上がまだ出来ていない

VIII. Dr.Ottofy編纂 歯科用語辞典

1923年にDr.Ottofyは、「STANDARD DENTAL DICTIONARY」を編纂している（図6）。

仏語、英語、イタリア語、ドイツ語、日本語の併せて1500語のもので、この執筆者には、血脇守之助、遠藤至六郎、花澤 鼎、中原市五郎、奥村鶴吉がいる。なお日本語は、ローマ字で140語が掲載されている。

IX. Dr.Louis Ottofyと奥村鶴吉先生とのICD（国際歯科学士会）発足の経緯

1920年11月、Dr.Ottofyがフィリピンにおける20年

の歯科医学教育活動を終え、米国への帰路、日本に立寄り奥村鶴吉主催の歓送会でICDの萌芽となる話合いが持たれ、各国歯科医師会単位であったFDIでは手の届かない歯科活動の領域において、互いに親密に接触しあえるような機構を作りたいと構想を披露した。

1926年フィラデルフィアの万国歯科医学会で再会し、奥村ほかの日本代表参加者から催促されDr.Ottofyは、世界の有力な学者たちとも交流・相談して、話し合い、世界各国の歯科医師と連繫を保ち、その人たちから何らかの奉仕をしてもらうような団体を結成するとした。またICDはFDIとは何ら矛盾するものではないと力説した^{10, 11)}。

1927年12月にICDの組織をまとめ上げる。

1928年7月ワシントンD.C.の州法により、法人組織の認可をとる。この年、奥村は本部理事の一人として推薦を受け、島峰徹と寺尾光吉らと共にICDフェローとなった。また当時の設立当初の役員一覧も判明する（表2）。

X. 奥村鶴吉先生のICD認証書発見

今回、奥村先生の関係書類の中から、ICDの認証書が発見された。Dr.L.Ottofy先生の署名も確認できる（図7）。

XI. Dr. L.Ottofyと奥村鶴吉先生とのICDに関わる書簡

前述の奥村先生のICD認証書に続き、関係書類の中から二人のやりとりの書簡数通が発見された。

表2 ICD 設立当初の役員一覧

Table 2 ICD original directors member ship

会 長:	Andres O. Weber (ハバナ/キューバ)
副 会 長:	Harold Chapman (ロンドン/イギリス)
事務局長:	Louis Ottofy (シカゴ/アメリカ)
財務担当:	John S Bagnell (チャルロッテタウン/カナダ)
理 事:	Georege Villain (パリ/フランス)
同	: Wilhelm Dieck (ベルリン/ドイツ)
同	: Ernest Jessen (バーゼル/スイス)
同	: Florestan Aguilar (マドリード/スペイン)
同	: Agnew Chiavaro (ローマ/イタリア)
同	: Bernhard Gottlieb (ウィーン/オーストリア)
同	: 奥村 鶴吉 (東京/日本)
同	: Benjamin K Wong (上海/中国)
同	: Rafidan Ahmed (カルカッタ/インド)
同	: John S. Burnett (モンテビデオ/ウルグアイ)
同	: W. G. Mckern (シドニー/オーストラリア)
同	: Edward Calder (ケープタウン/南アフリカ)



図7 奥村鶴吉先生のICD 認証書

Fig. 7 Dr. Okumura's ICD Certificate original

1) 書簡その1

Dr.Ottofy→ICD関係者

原本 記載年月日不詳 (図8)

Dr. LOUIS OTTOFY

国際歯科学士会

アメリカ合衆国 カリフォルニア州 オークランド
バーノンテラス175

ドクター各位:

アメリカの歯科史研究家であるL. Parmly Brown 医師により、全米歯科スクールについて最新情報を必要とする歯科教育に関し、世界規模での調査の準備が行われております。この調査に是非とも賛成の意を表します。その公表は、明らかに価値あることとなり、また、Brown医師にICDの他のフェロー達が、それぞれの国のために必要なデータを提供することにより助けていることとなります。

貴殿におかれましても、下記質問事項に可能な限りお答え頂き、ご都合のよろしい時に私宛その回答を郵送頂き、Brown医師のお役に立ちたく存じます。

1. 貴国の歯科スクールの名前とその所在地はどこですか？そして、大学との関係がある場合

には、どの大学ですか？

2. それらのスクールにより授与される正式学位あるいは肩書は何ですか？ それらのアプリケーションはどのようなものが使われますか？ 貴国の言語として使用される際の正式称号、また、卒業証書に学位称号を記載する際、どのようになりますか？

例えば、(アメリカでの) アプリビエーションD.M.D.はDoctor of Dental Medicineで、(ドイツでの) のアプリビエーションDr. Med. Dent.は、Dentariae Medicinae Doctor。

3. 授与された追加の、あるいは卒業の、肩書は何ですか？ 例えば、イギリスでは、Licentiate in Dental Surgery (L.D.S.)に加えてBachelor of Dental Science (B.D.S.)、そして、アメリカでは、Doctor of Dental Surgery (D.D.S.)に加えて、Master of Dental Science (M.D.S.)。

4. あなたの歯科スクールにおけるコースの長さは何の位ですか？

5. 貴国で歯科プラクティスに必要な医学教育(M.D.学位)は、何ですか？ あるいは、Doctor of Stomatologyあるいは、歯科学の

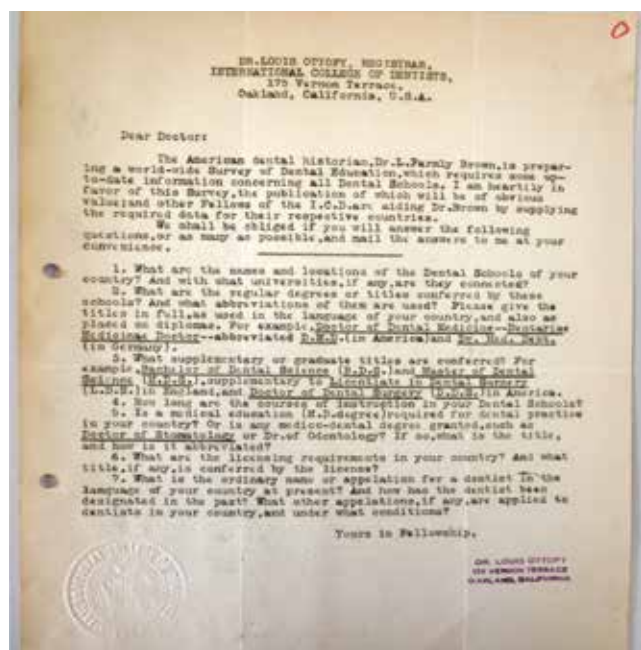


図8 Dr. Ottoffyより奥村先生への手紙-1
ICDアンケート

Fig. 8 The letter from Dr. Ottoffy to Dr. Okumura

ドクターのように、何か歯科医学の学位が与えられますか？与えられる際の肩書きは何で、どのように略されるのですか？

6. 貴国での免許取得要件は何ですか？ 要件がある場合は、免許で授与される肩書きはどのようなものですか？

7. 現在、貴国の言葉で歯科医の普通の呼び方あるいは呼称は何ですか？ 過去の歯科医の呼びかたは何ですか？ 呼び方がある場合は何ですか？ 貴国において歯科医に用いられるその他の呼称は何ですか？

親愛なる

Dr. LOUIS OTTOFY

2) 書簡その2

Dr.Ottoty→奥村先生 1930 Sept 16th (図9)

LOUIS OTTOFY, D.D.S., M.D., LL.D., F.I.C.D.

アメリカ合衆国 カリフォルニア州 オークランド
バーノンテラス175

1930年9月16日

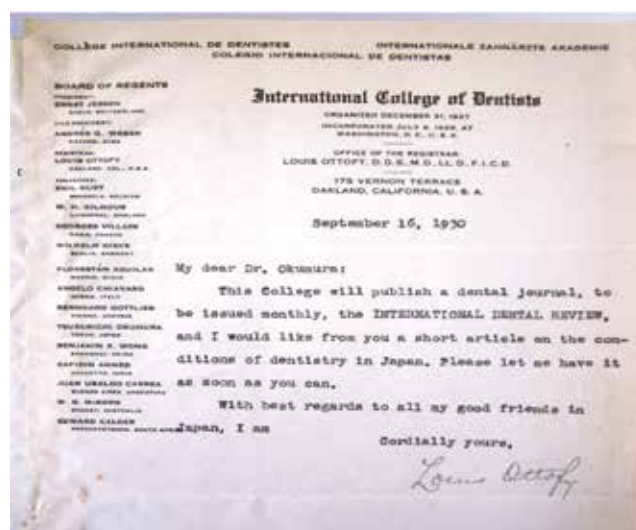


図9 Dr. Ottoffyより奥村先生への手紙-2

Fig. 9 The letter from Dr. Ottoffy to Dr. Okumura

敬愛する奥村先生：

本学士会では、月刊で歯科ジャーナル、INTERNATIONAL DENTAL REVIEWを発行する予定でして、日本における歯科学事情についての短編記事を先生にお願いしたく存じます。

出来る限りお早く、私宛に記事を頂きたく宜しくお願いします。

日本の全ての良き友に、私の敬意をお伝えください。

親愛なる

ルイス オットフィー

3) 書簡その3

Dr.Ottoty→奥村先生 1935 Aug 9th (図10)

DR. LOUIS OTTOFY

カリフォルニア州 オークランド バーノンテラス175

1935年8月9日

敬愛する奥村先生：

私、「顔面補綴」に特化した書物の執筆中です。手術作業工程には関心がなく補綴、すなわち人工的鼻、義眼、義耳、またその他の顔面の部位にのみ興味有りということです。

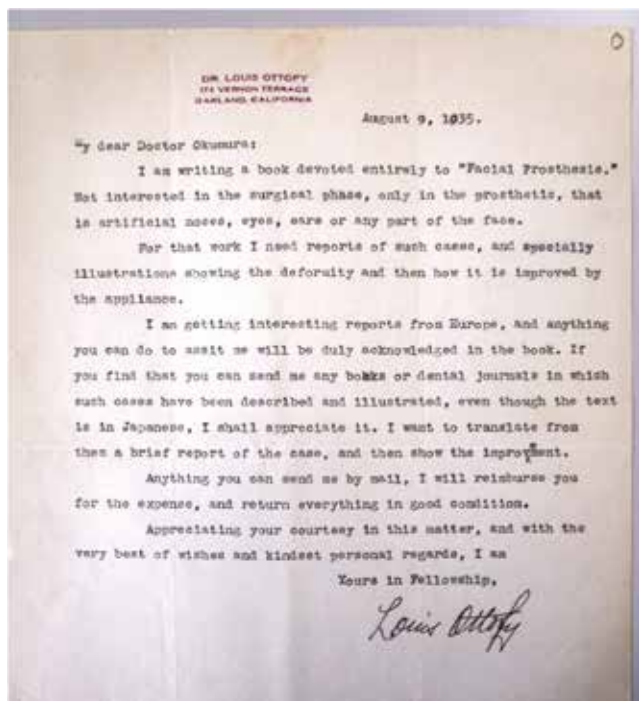


図10 Dr. Ottofyより奥村先生への手紙-3

Fig. 10 The letter from Dr. Ottofy to Dr. Okumura

その研究故に、このような事例報告を必要とし、特に変形を示すイラストと、補綴により如何に治癒しているかの事例を必要としています。

ヨーロッパから興味深い報告を入手しており、先生ができることが何かをお示し下さると助かり、その書物に謝辞を記載します。

日本語のテキストでも差し支えございませんので、このようなイラストが記載され図示された書籍か歯科ジャーナルを見つけたら送って頂く分には大丈夫です。それら要約レポートを翻訳して、そして治癒を示したく存じます。

先生におかれましては、何某か郵送して頂くことも可能ですし、私においては、経費補填の用意があり、またお預かりの物全てを良好な状態で返却する次第であります。

本件に関して先生の御好意を感謝しつつ、また、私個人として格別よろしくお願いの程よろしく申し上げます。

親愛なる

ルイス オットフィー

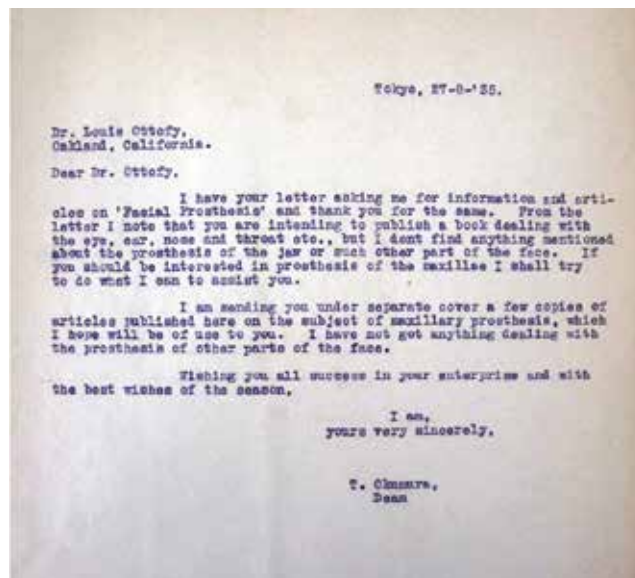


図11 奥村先生よりDr. Ottofyへの手紙-4

Fig. 11 The letter from Dr. Okumura to Dr. Ottofy

4) 書簡その4

奥村先生→Dr.Ottofy 1935 Aug 27th (図11)

Louis Ottofy 先生

カリフォルニア州 オークランド

親愛なるOttofy先生：

情報提供依頼及び「顔面補綴」についての記事依頼の貴信拝受いたしましたと共に、それらに感謝致します。手紙から、眼、耳鼻、咽頭などを扱う書籍の出版をなさろうとしていることに気付きましたが、下顎その他の顔面の部位の補綴について記載した物が何も見出せません。先生が上顎の補綴にご興味がおありでしたら、お手伝いできることにこれから当たってみます。

先生に使って頂きたいもので、上顎の補綴をテーマとする刊行物の写しを別便にてお送りしています。他の顔面の部位に関する補綴を扱うものは何ら入手していません。

先生の企画が全て成功することを祈りつつ、季節のご挨拶を込めて。

敬具

奥村鶴吉

6) 書簡その5

Dr.Ottoby→奥村先生 1935 Oct 18th (図12)

DR. LOUIS OTTOFY

カリフォルニア州 オークランド バーノンテラス175

1935年10月18日

親愛なる奥村先生：

8月28日の貴書拝受いたしました。記事を送って頂きましたが生憎、拙書に必要なものではございません。要は、顔面、口内、obturatorなどの手術については、本国の文献では十分取り上げられておりますが、怪我、破壊、部分喪失の代替を作るために歯科医師らが行うことに、専門書籍はこれまで見当たりません。したがって、目下取り組み中であります。英国、フランス、ドイツ、オーストリア、ハンガリー、ベルギー、フィンランド、メキシコ、その他多くの国々からの素晴らしい報告書及びイラストを入手済みですが、この本には日本からのものも記載したく存じます。この分野の医療業務があらうかと思ひます。私は、フィリピン滞在中に鼻、目、耳を15個作りました。

メイヨー・クリニックのガドナー先生からの手紙によりますと、規定により、同クリニックにおける症例の写真持ち出しは一切認められておりません。したがって、東京にて、歯科医療に従事していると思われるKenji Hiyama先生からの場合でも、イラストが入手不可能となっております。先生を探し出して頂き、住所を知らせてくだされば、メイヨー・クリニックなどの事例のイラストを送付できるかもしれません。

よろしく願ひの程、私個人といたしましても格別お願い申し上げます。

親愛なる

ルイス オットフィー

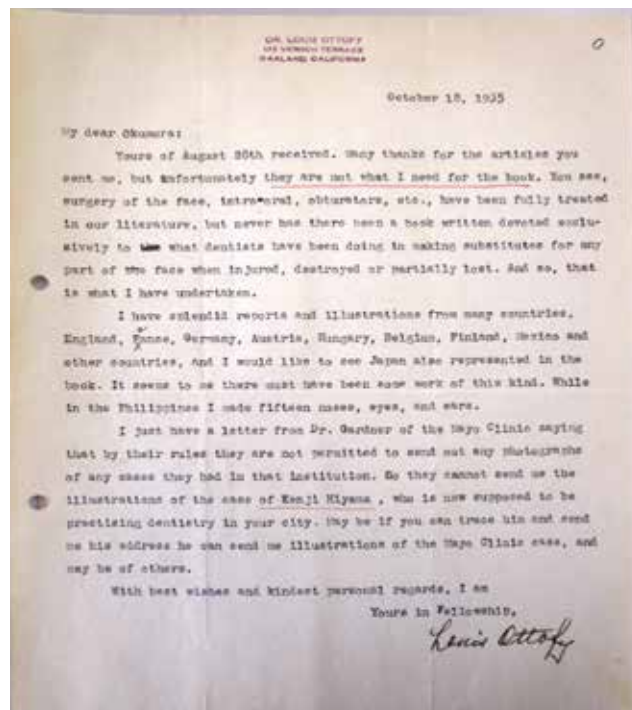


図12 Dr. Ottobyより奥村先生への手紙-5

Fig. 12 The letter from Dr. Ottoby to Dr. Okumura

XII. 奥村鶴吉先生が着用したICDのアカデミックガウンとキャップ

東京歯科大学史料室倉庫より、奥村鶴吉先生が着用したICDガウンも発見された。ブリキの保管箱の中にきちんと畳まれたガウンは一部解れてはいるものの色褪せることなく保管されていた。襟裏にはT.Oのイニシャルと縫製メーカーのシカゴのE.R.MOORE.CO.の明記がされている(図13)。

XIII. まとめ

奥村鶴吉先生の再々調査を行うことにより、奥村先生の論文や著書、業績、崇高な歯科医学教育への熱意さらに母校の大学への躍進準備などを調べながら、Ottoby先生の業績や足跡をたどることができ、奥村先生のICDの認証書や設立当初のICD組織・定款ならびに当時の役員一覧を発見し、さらにOttoby先生とのやりとりの書簡数通、そして奥村先生が着用したICDのアカデミックガウンとアカデミックキャップの発見に至ることができた。

奥村鶴吉先生が、戦前の厳しい世界情勢の中、欧米



図13 奥村先生のICDアカデミックガウンとキャップ

Fig. 13 Dr. Okumura's original ICD Academic gown and cap

へと往来し、出会った人々との交流を深めつつ、大学の運営の傍ら研究・教育の業績の数々を築き上げ、かつ専門学校から大学へと変貌させる目標をしっかりと掲げながら、海外との交流をさらに深めるべくICD設立にOttofy先生と協力しながら努力された足跡を顧みることができたことは、私にとってかけがえのない貴重な経験であった。

XIV. おわりに

今回は東京歯科大学の井出理事長・学長の絶大なるご理解のもと、千葉キャンパスの図書館1階の史料室、史料室倉庫ならびに貴重本保管室に入ることをお許し頂き、一昨年に半年にわたる延べ10回の調査を、図書館の故北林伸康課長や野口順子さん筆頭とする図書館司書の方々のご協力のもと貴重な史料の数々を発見できたことは、感謝に堪えない。また史料検索のご

指導頂いたICD前国際会長 千田 彰先生ならびに元国際理事の橋本光二先生にも併せて感謝申し上げます。さらに今回の調査にご理解を頂いたICD日本部会執行部役員各位に深謝する次第である。

参考文献

- 1) 森山徳長, 他: I.C.D.創設者 Louis Ottofyのフィリピンにおける活動と業績の書誌学的研究, 日本歯科医史学会誌, 21巻1号, 35~40, 1995年9月.
- 2) 森山徳長, 他: 国際歯科学士会の歴史的研究(その1) 戦前日本および米国における発祥, 日本歯科医史学会誌, 22巻1号, 29~30, 1998年4月.
- 3) 森山徳長, 他: 国際歯科学士会の歴史的研究(その1) 戦前日本および米国における発祥, 日本歯科医史学会誌, 22巻2号, 100, 1998年4月.
- 4) 森山徳長, 他: 国際歯科学士会の歴史的研究(その2) 戦後日本におけるICD活動の復活, 日本歯科医史学会誌, 22巻3号, 165~166, 1998年9月.
- 5) 森山徳長: 国際歯科学士会共同創設者ルイス・オットフィーおよび奥村鶴吉に関する研究(その1), 日本歯科医史学会誌, 28巻2号, 126, 2009年9月.
- 6) 森山徳長, 他: 国際歯科学士会沿革, 国際歯科学士会日本部会雑誌, 1巻1号, 8~11頁, 1969年.
- 7) 今田見信: 日本歯科界の揺籃期・I.C.D.創設のドクター・オットフィーの日本記録, 国際歯科学士会日本部会雑誌, 7巻1号, 10~15, 1976年11月.
- 8) 森山徳長: I.C.D.創設者 Louis Ottofyと日本の関係についての書誌学的論考, 国際歯科学士会日本部会雑誌, 10巻1号, 7~22, 1979年10月.
- 9) 森山徳長: 特別講演 戦前のI.C.D.創設にかかわるLouis Ottofy—奥村鶴吉両先生の業績, 国際歯科学士会日本部会雑誌, 28巻1号, 6~16, 1997年8月.
- 10) 森山徳長: ICD日本部会の沿革 ICD日本部会創立40周年記念誌, 17~20, 1997年.
- 11) 森山徳長: ICD日本部会成立の歴史, ICD日本部会創立50周年記念誌, 86~95, 2007年.
- 12) 森山徳長: 奥村鶴吉とICDの起源, 国際歯科学士会日本部会雑誌, 41巻1号, 72~73, 2010年.
- 13) 橋本光二: ICD創設者奥村鶴吉先生に関する再調査の報告, 国際歯科学士会日本部会雑誌, 46巻1号, 8~13, 2015年.
- 14) 金子 譲: 歯科医学教育制度の近代から現代へ—奥村鶴吉の足跡—, 国際歯科学士会日本部会雑誌, 50巻1号, 8~14, 2019年.
- 15) 松宮誠一(編): 血脇守之助傳, 東京歯科大学, 1979年.
- 16) 石川達也編: 東京歯科大学百年史, 東京歯科大学, 559~579, 1991年.
- 17) 榊原悠紀田郎: 歯記列伝, 161~167, クインテッセンス出版, 1995年.
- 18) 金子 譲(編): 近代歯科医学教育を拓く, 東京歯科大学120周年記念誌, 2011年.
- 19) 歯科医学叢談: 高山歯科医学院, 第3巻4号, 1898年.

Report of Re-survey on ICD Founder Dr. Tsurukichi Okumura —Celebrating the 100th Anniversary of the Founding of ICD—

Yoshinobu IMAMURA. D.D.S., Ph.D., Prof., F.I.C.D.

Standing Director of publicity & editorial part of ICD Japan section

Two years ago, the International College of Dentists celebrated its 100th anniversary. Taking this opportunity, I was planning to re-examine the relationship between Dr. Okumura and Dr. Ottofy at the time of establishment and report at the 50th Winter Society ICD Japan Section, but unfortunately the Winter Society was canceled due to the spread of corona infection (covid 19) in Japan. The 100th Anniversary Party was also canceled and I lost the opportunity to report it, and I have reached today.

Regarding Dr. Tsurukichi Okumura, the Founder of ICD, Dr. Tokunaga Moriyama has posted many times in ICD magazines and described the “History of the ICD Japan Subcommittee” on the ICD website. In 2015, Dr. Koji Hashimoto summarized it in the ICD magazine (Volume 46, No. 1) as “Report of a re-investigation on Dr. Tsurukichi Okumura, the Founder of ICD”. After that, a video of Professor Okumura by former Vice Chairman Setsuya Suzuki and others was discovered and edited. Under these circumstances, we received a request from Chairman Takashi Miyazaki to re-excavate historical materials at the time of the establishment of ICD, and with the permission of Yoshinobu Ide, the president of Tokyo Dental College, the successive generations of the historical materials room on the first floor of the Chiba Campus Library. I investigated the president's university archives warehouse.

As a result, from the thousands of documents stored by Dr. Okumura, several letters between Dr. Okumura and Dr. Ottofy at the time of the establishment of ICD, Dr. Okumura's ICD certificate (original), and the ICD that Dr. Okumura, I found many valuable historical materials such as gowns and academic caps made in Chicago. In addition, a report introduction when Dr. Ottofy visited Japan in the predecessor of the magazine “Dental Science Bulletin” of the Tokyo Dental College Society, and Japanese dental medicine at that time posted by Dr. Ottofy in “DENTAL BRIEF”. I was also able to search for two reports of the situation. The “STANDARD DENTAL DICTIONARY” donated by Dr. Ottofy was also found in the library stack.

This time, we will show and report these later.

Key words : Dr. Tsurukichi Okumura, Dr. Louis Ottofy, The letters of Dr. Okumura between Dr. Ottofy, Dr. Okumura's Certificate of ICD, ICD original member list, ICD original constitution, Dr. Okumura ICD academic gown and cap